

NPO法人 俳句甲子園実行委員会 (E-mail:info@haikukoushien.com)

〒790-0814 愛媛県松山市味酒町1丁目10-2

TEL:089-943-1512(平日13:00~17:00) FAX:089-948-4819

松山市役所 文化・ことば課 (E-mail:bunkakotoba@city.matsuyama.ehime.jp)

〒790-8571 愛媛県松山市二番町四丁目7番地2

TEL:089-948-6952(平日8:30~17:15) FAX:089-934-1287

今年の俳句甲子園は幕を閉じましたが、「俳句に恋をした」皆さんが望むなら、俳句の扉はいつでもどこでも開かれています。これから未来へ向かって進む時「自分だけの一句」への可能性をずっと持ち続けていてください。

立秋を映さない窓に救われた

高校3年生最後の俳句甲子園

この夏、大会とその後の部活動引退を控えて、複雑に揺れ動く心境を、俳句甲子園にかかわる、全ての高校3年生の皆さんが味わったことと思います。

その一人である全国大会に出場した愛媛県立松山西中等教育学校(2年ぶり5回目)6年生、俳句部部长の輪違典子さんが、8月に部誌「彗星」のために書いた文章(一部編集を紹介)します。

熱い後輩に恵まれた。熱い彼らは眩しい。

正直なところ焦っていた。後輩Tが開くデイベイト講座を、先生とBチームでやっている句会を、横目で見ながらなんだか自分勝手に焦った。眩しさの中の一点の陰になっていないだろうか、心配になった。自分自身に知らんぷりをしてたけれど、どうがんばって

も僻んだ心が叫んでいた。

「高1の時見た全国大会の眩しさが忘れられなくて」なんて言っていたけど、俳句甲子園もはつきり言って結局よくわからなかった。正しさ、は最初から胡散臭い。大間違いかもしれないいろいろな大正解のふりして語彙を並べるのが変な感じだ。(どの口が言うかと思つた後輩達よ、その感想正解(だと思っ)だけど、いつのまにか、鑑賞が、自句自解が好きになって、誰かに聞いてほしくなつて、卑しいエゴイストの私は完成もしていないふにやふにやのエゴを高2の秋に置いてけぼりにした。だけど語ることを始めてからも、何度も振り返りそうになった。ちいさなエゴを自分で守ってしまおうかと考えた。それでも、あのね、そうしなかったのは。

最近になって思うことがある。漠然としているから笑つて。私は俳句部が好きだ。この三年間が、本当に幸せだったのだ。眩しさの中に、輝きの要素として、自分が存在しているようにも僭越ながら思った。自分でも信じられないくらい熱量を生んで、惜しみなくそれを使った。これが本当に楽しかった。納得するまで改作したり、改作しても理解し合えなかったり、みんなで吟行に行ったり、他に武者修行に行ったり、その帰り道に夜市に寄ったり、自転車のヘルメットを抱え、汗をびっちょりかいた私たちが、林檎飴をぬるぬると舂めながら、七月の終わりの大街道を闊歩していたことまでもを、忘れたくないなあと思う。

二〇一六 立秋

句詰めをするテーブルの隣では、先生を中心に小さ

な句会が開かれていた「君らも一句出し！」先生に言われ、慌てて歳時記を開く。兼題は「立秋」「水鉄砲」あともう一つ、なんだったか。立秋のページを開いて、もうこうやって慌てて俳句を作ることもなくなるんだなと思に至る。最後の夏が終わって行くのを感じる。漠然と悲しくなりながら、なにか句に詠むモチーフを探して窓に目を向けた。いつもならその先にある、山や、海や、小学校、トラクターに想いを馳せるのに、六つ並んだ窓ガラスで私の思考は固まった。端から窓を目線でなぞる。秋を映し始めた窓、窓、窓。ああ、終わっていく、私の青春が終わっていく。眩しさに出会えてよかった。これからぐんと伸びていく、俳句部に革命を起こしてくれる後輩たちに出会えてよかった。私をここまで連れて来てくれた先生方、先輩方に出会えてよかった。ありがとう、ありがとう、幸せな三年間をありがとう。ぼんやりと三年間を思いつつ、最後の窓に目を向ける。夏。その窓だけ、晩夏の光を湛えている。私の、眩しさを前にした僻んだ心を打ち砕くような、なつのひかり。